

月夜のでんしんぼしら

宮沢賢治

青空文庫

ある晩、恭一はぞうりをはいて、すたすた鉄道線路の横の平らなところをあるいて居おりました。

たしかにこれは罰ばつきん金です。おまけにもし汽車がきて、窓から長い棒などが出ていたら、一ぺんになぐり殺されてしまったでしょう。

ところがその晩は、線路見まわりの工夫もこず、窓から棒の出した汽車にもあいませんでした。そのかわり、どうもじつに変てこなものを見たのです。

九日の月がそらにかかっていました。そしてうろこ雲が空いっぱいでした。うろこぐもはみんな、もう月のひかりがはらわたの

底までもしみとおつてよろよろするといふふうでした。その雲のすきまからときどき冷たい星がぴっかりぴっかり顔をだしました。恭一はすたすたあるいて、もう向うに停車場ていしやばのあかりがきれいに見えるところまできました。ぽつんとしたまっ赤なあかりや、硫黄いおうのほのおのようにぼうとした紫むらさきいろのあかりやらで、眼めをほそくしてみると、まるで大きなお城があるようにおもわれるのでした。

とつぜん、右手のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶつて、上の白い横木を斜ななめに下の方へぶらさげました。これはべつだん不思議でもなんでもありません。

つまりシグナルがさがったというだけのことです。一晩じゆうに十

四回もあることなのです。

ところがそのつぎが大へんです。

さつきから線路の左がわで、ぐわあん、ぐわあんとうなつていたでんしんばしらの列が^{おおい}大威張りで一ぺんに北のほうへ歩きだしました。みんな六つの^{せと}瀬戸もののエボレットを^{かざ}飾り、てっぺんにはりがねの^{やり}槍をつけた^{とたん}亜鉛のしゃつぽをかぶつて、^{かたあし}片脚でひよいひよいやうて行くのです。そしていかにも恭一をばかにしたように、じろじろ横めでみて通りすぎます。

うなりもだんだん高くなって、いまはいかにも昔^{むかし}ふうの立派な軍歌に変わってしまいました。

「ドツテドツテ、ドツテド、

でんしんばしらのぐんたいは

はやさせかいにたぐいなし

ドツテテドツテテ、ドツテテド

でんしんばしらのぐんたいは

きりつせかいにならびなし。」

一本のでんしんばしらが、ことに肩かたをそびやかして、まるでうで木もがりがり鳴るくらいにして通りました。

みると向うの方を、六本うで木の二十二の瀬戸もののエボレットをつけたでんしんばしらの列が、やはりいっしよに軍歌をうたつて進んで行きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

二本うで木の工兵隊

六本うで木の竜騎兵^{りゆうきへい}

ドツテテドツテテ、ドツテテド

いちれつ一万五千人

はりがねかたくむすびたり」

どういうわけか、二本のはしらがうで木を組んで、びっこを引いていっしょにやってきました。そしていかにもつかれたようにふらふら頭をふって、それから口をまげてふうと息を吐^つき、よろ倒^{たお}れそうになりました。

するとすぐうしろから来た元気のいいはしらがどなりました。

「おい、はやくあるけ。はりがねがたるむじやないか。」

ふたりはいかにも辛^{つら}そうに、いつしよにこたえました。

「もうつかれてあるけない。あし^{くさ}さきが腐り出したんだ。長靴^{ながぐつ}」

のタールもなにももうめちやくちやになつてゐるんだ。」

うしろのはしらはもどかしそうに叫^{さけ}びました。

「はやくあるけ、あるけ。きさまらのうち、どつちかが参つても一万五千人みんな責任があるんだぞ。あるけつたら。」

二人はしかたなくよろよろあるきだし、つきからつきとはしらがどんどんやつて来ます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド

やりをかざれるとたん帽^{ぼう}

すねははしらのごとくなり。

ドツテドツテテ、ドツテテド

肩にかけたるエボレット

重きつとめをしめすなり。」

二人の影かげももうずうつと遠くの緑ろくしやう青せいいろの林の方へ行つて
しまい、月がうろこ雲からぱつと出て、あたりはにわかにも明るく
なりました。

でんしんばしらはもうみんな、非常なご機嫌きげんです。恭一の前に
来ると、わぎと肩をそびやかしたり、横めでわらつたりして過ぎ
るのでした。

ところが愕おどろいたことは、六本うで木のまた向うに、三本うで
木のまっ赤なエボレットをつけた兵隊があるということです。

その軍歌はどうも、ふしも歌もこつちの方とちがうようでしたが、こつちの声あまり高いために、何をうたっているのか聞きとることができませんでした。こつちはあいかかわらずどんどんやって行きます。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

寒さはだえをつんぎくも

などで腕木うでぎをおろすべき

ドツテテドツテテ、ドツテテド

暑さ硫黄をとかすとも

いかでおとさんエボレット。」

どんどんどんどんやって行き、恭一は見ているのさえ少しつか

れてぼんやりなりました。

でんしんばしらは、まるで川の水のように、次から次とやって来ます。みんな恭一のことを見て行くのですけれども、恭一はもう頭が痛くなってだまって下を見ていました。

俄にわかに遠くから軍歌の声にまじって、

「お一二、お一二、」というしわがれた声がきこえてきました。

恭一はびつくりしてまた顔をあげてみますと、列のよこをせいの低い顔の黄いろなじいさんがまるでぼろぼろの鼠ねずみいろの外がい套とうを着て、でんしんばしらの列を見まわしながら

「お一二、お一二、」と号令をかけてやってくるのでした。

じいさんに見られた柱は、まるで木のように堅かたくなって、足を

しやちほこばらせて、わきめもふらず進んで行き、その変なじいさんは、もう恭一のすぐ前までやってきました。そしてよこめでしばらく恭一を見てから、でんしんばしらの方へ向いて、

「なみ足い。おいっ。」と号令をかけました。

そこででんしんばしらは少し歩調を崩^{くず}して、やっぱり軍歌を歌って行きました。

「ドツテテドツテテ、ドツテテド、

右とひだりのサアベルは

たぐいもあらぬ細身なり。」

じいさんは恭一の前にとまって、からだをすこしかがめました。

「今晚は、おまえはさつきから行軍を見ていたのかい。」

「ええ、見てました。」

「そうか、じゃ仕方ない。ともだちになろう、さあ、握手あくしゆしよう。」

じいさんはぼろぼろの外套の袖そでをはらって、大きな黄いろな手をだしました。恭一もしかたなく手を出しました。じいさんが「やつ、」と云いってその手をつかみました。

するとじいさんの眼だまから、虎とらのように青い火花がぱちぱちとでたとおもうと、恭一はからだがびりりつとしてあぶなくうしろへ倒れそうになりました。

「ははあ、だいぶびびいたね、これでごく弱いほうだよ。わしと
も少し強く握手すればまあ黒焦くろこげだね。」

兵隊はやはりずんずん歩いて行きます。

「ドツテドツテドツテ、ドツテド、

タールを塗ぬれるなが靴の

歩はばは三百六十尺。」

恭一はすっかりこわくなって、歯ががち鳴りました。じいさんはしばらく月や雲の工合ぐあいをながめていましたが、あまり恭一が青くなってがたがたふるえているのを見て、気の毒になったらしく、少ししずかに斯こう云いました。

「おれは電気総長だよ。」

恭一も少し安心して

「電気総長というのは、やはり電気的一种ですか。」とききまし

た。するとじいさんはまたむつとしてしまいました。

「わからん子供だな。ただの電気ではないさ。つまり、電気のすべての長、長というのはかしらとよむ。とりもなおさず電気の大將ということだ。」

「大將ならずいぶんおもしろいでしょう。」恭一がぼんやりたずねますと、じいさんは顔をまるでめちやくちやにしてよろこびました。

「はっはっは、面白おもしろいさ。それ、その工兵も、その竜騎兵も、向うのてき弾だんへい兵も、みんなおれの兵隊だからな。」

じいさんはぷつとすまして、片っ方の頬ほおをふくらせてそらを仰あおぎました。それからちようど前を通って行く一本のでんしんばし

らに、

「こらこら、なぜわき見をするか。」とどなりました。するとそのはしらはまるで飛びあがるぐらいびっくりして、足がぐにやんとまがりあわててまっすぐを向いてあるいて行きました。次から次とどしどしはしらはやって来ます。

「有名なはなしをおまえは知ってるだろう。そら、むすこが、エングランド、ロンドンにいて、おやじがスコットランド、カルクシャイヤにいた。むすこがおやじに電報をかけた、おれはちゃんと手帳へ書いておいたがね、」

じいさんは手帳を出して、それから大きなめがねを出してもつともらしく掛^かけてから、また云いました。

「おまえは英語はわかるかい、ね、センド、マイブーツ、インスタンテウリイすぐ長靴送れとこうだろう、するとカルクシヤイヤのおやじめ、あわてくさっておれのでんしんのはりがねに長靴をぶらさげたよ。はっはっは、いや迷惑めいわくしたよ。それから英国ばかりじゃない、十二月ころ兵營どのへ行つてみると、おい、あかりをけしてこいと上等兵殿どのに云われて新兵が電燈をふつふつと吹ふいて消そうとしているのが毎年五人や六人はある。おれの兵隊にはそんなものは一人もないからな。おまえの町だつてそうだ、はじめに電燈がついたころはみんながよく、電気会社では月に百石こくぐらい油をつかうだろうかなんて云つたもんだ。はっはっは、どうだ、もつともそれはおれのように勢力不滅ふめつの法則や熱力学第二則がわ

かるとあんまりおかしくもないがね、どうだ、ぼくの軍隊は規律がいいだろう。軍歌にもちやんとそう云つてあるんだ。」

でんしんばしらは、みんなまっすぐを向いて、すまし込こんで通り過ぎながら一きわ声をはりあげて、

「ドツテドツテドツテ、ドツテド

でんしんばしらのぐんたいの

その名せかいにとどろけり。」

と叫びました。

そのとき、線路の遠くに、小さな赤い二つの火が見えました。するとじいさんはまるであわててしまいました。

「あ、いかん、汽車がきた。誰たれかに見附みつかったら大へんだ。もう

進軍をやめなくちやいかん。」

じいさんは片手を高くあげて、でんしんばしらの列の方を向いて叫びました。

「全軍、かたまれい、おいつ。」

でんしんばしらはみんな、ぴったりとまって、すっかりふだんのとおりになりました。軍歌はただのぐわあんぐわあんといううなりに変わってしまいました。

汽車がごとくやってきました。汽き缶かん車しゃの石炭はまつ赤に燃えて、そのまえで火夫は足をふんばって、まつ黒に立っていました。ところが客車の窓がみんなまつくらでした。するとじいさんが

いきなり、

「おや、電燈が消えてるな。こいつはしまった。けしからん。」
と云いながらまるで兎うさぎのようにせ中をまんまるにして走っている
列車の下へもぐり込みました。

「あぶない。」と恭一がとめようとしたとき、客車の窓がぱつと
明るくなつて、一人の小さな子が手をあげて

「あかるくなつた、わあい。」と叫んで行きました。

でんしんばしらはしずかにうなり、シグナルはがたりとあがつ
て、月はまたうろこ雲のなかにはいりました。

そして汽車は、もう停車場ていしやばへ着いたようでした。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部

・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

月夜のでんしんばしら

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>